

## この歳での大学生活は勉強になりますよ

朝倉支部 宮地 伊織

### 1) 大学生になった

平成21年4月より9月までの約半年間、総務省所管の自治大学校に入学することとなった。「自治大学校？」そうです。自治体職員が大学生になれるのです。とはいっても、この大学は、自治体職員に政策形成能力および行政管理能力を修得させるための研修機関ですので、学生は自治体職員のみで、かつ年齢的にも40代前半程です。当然、大学ですので試験や論文など盛りだくさんですが…。派遣の話を頂き、「自治大学校って、確か総務省所管で技術職が行けるところなのだろうか?」「もしかしたら、国土交通大学校の間違いでは?」と思いが頭の中を駆け巡ってからちょうど半年、自治大学校での研修を終え、今、この文章を書いています。この研修が、私の人生の中でかけがえのないものとなるろうとは当初思ってはいませんでした。

「私の人生の中でかけがえのないもの」と表現しましたが、決して大げさではありません。研修で得たものは、行政マンとしての考え方やスキルなど仕事の面はもちろんのこと、私的な面でも大きなものを得ることができ、また、私を支えてくれている方々を意識できる大変よい機会ともなりました。今回は、仕事の面を中心に「これまでの自分から、研修で何を得てどう感じたのか」「今後、自分としてどう行動していきたいのか」を中心に書きたいと思います。



(校舎：平成15年築で新しい)

### 2) 大学生活が始まり

研修当初の段階で、行政マンとしての心構えや地方分権が進む中で自治体職員がこれから担っていくべき役割について、様々な講師から頻繁に持論を聞きました。この中で、「我々は地域のプロデューサーにならなければならない」「そのためには的確に現状を把握（全国調査の結果や方向性の切り貼りではなく地域の状況を自分の目で感じ整理する）し、知識や経験に裏付けられた実効性のある方策を自分なりに打ち出せ」といった地域に根ざした自治への方向性と役割を再度強く意識でき、仕事のやり方そのものについての話においても、これまで自分の仕事に対する考え方が間違っていないことを確認できました。このことは、大きな収穫ではあったし自信にもなりました。しかしながら、分かっていたのだが、想像以上に自分にはまだまだ足りない部分が、知識面や技術面で相当多くある

ことに気づかせられました。

また、研修生にも驚かされました。事務職の研修生がほとんどとは聞いてはいましたが、79名の研修生の内、技術系の職種の研修生が10名いました（土木職は私一人であった）。彼らと話をするにつれて、その能力の高さに驚き、技術部門だけではなく、行政全般に関する前向きな改革への意欲など「凄いところに来た」と感じました。行政全般に関する研修の中では、政策研究論文の作成や地域行政政策での様々な行政課題に関する討議など、自分がどこまでやれるのかとの不安もおぼえましたが、このようなすばらしい環境を活かして積極的に多くの人と議論し、様々なことを吸収したいと思いました。



(教科書：70冊以上も…)

### 3) 研修で得たこと

初歩的な話ではあるのですが、「地方自治を預かる行政では、国民からの付託により、どのようなルールや権限の行使を許され、どのような立場で事務を行っているか」「法制度上のどこに、担保されているのか」「憲法、行政法や民法など基礎的な知識の整理が不可欠」さらに、「効率と公平のトレードオフの関係のバランスをとりながら、どのような視点に注視し、制度を構築していくべきか」など地方自治の根幹にふれ、身の引き締まる思いでした。これまであまり意識してこなかった我々の根っこでもある自治制度自体を学び、自分でやるべき事を考えさせられました。

自分で足りない部分を今回の研修で多く学ぶことができたのですが、特に意識して考えてきた地方分権（地方政府）に関することについて書きます。

研修を進めるにつれ、地方分権に関する知識があまりにも不足していたことを痛感しました。地方行政がどう生まれ変わらなければならないのか。また、我々がどうしなければならないのかについて深く考えさせられました。

特に、憲法で示されている地方自治の本旨について、地域主体で行うには現行制度上でも制限がなお存在しており、地方自治体も踏み出そうという意欲が少ない状況であること。また、住民自治と団体自治の観点から地方分権が進められ、そこに関する法制度に地方分権改革推進委員会などが細かい作業も含め、中央省庁と具体的にやりとりしながら進められていること。地方分権化の中で、住民の関わり（チェック機能を含め）を議会改革、監査制度改革や情報公開制度の中で取り込まれている内容など、広範にわたり、本質的な議論も含め具体的に学べたことは様々な行政課題を考える上での基礎となり、重要なものでした。



(講義室：六法全書は必需品)

「地域」についても刺激を受けました。例えば鶏の鳴き声についてですが、日本語では「コケッコー」ですが、ネパールでは「ククリーカン」と表現されます。鶏が日本語とネパール語を使い分けているはずはなく、鳴き声を聞いている人の文化によって表現が変わってくるのです。また極端ですが、人が死ぬと日本では火葬だが、土葬や鳥葬の地域もあります。鳥葬は日本人からすれば考えられないような光景です（犯罪になる）が地域によってはそうではないのです。そこで培われてきた文化なのです。日本の中でも、様々な文化、付け加えれば風土が存在していましたが、これを高度成長時代からの開発基調の中で失ってきたのではないかと。しかし、その根っこが大きく変わっているわけではなく、今も奥底に存在している。これを再認識して、全国画一ではなく、さらに発展させて地域に根付く（培っていく）ように、行政として支援していくことが求められているのです。もっと、地域のことを知らなければならない。

#### 4) 心に刻まれたもの

自治体行政学の講義をして頂いた、東京大学名誉教授の大森彌さんから聞いた2人の言葉が深く心に残っています。このことは、これから私が仕事をしていく上での大切な言葉となると感じています。

1つ目は、福岡県の柳川市職員として勤めていた広松伝さんの言葉です。彼は、柳川市で掘割の埋め立て計画を進める都市下水道係長に任命されたが「掘割をなくしてはならない」と市長に直談判し、住民との対話により開発に待ったをかけた人物です。この方の言葉に「プランニングには、机はいらない。必要なのは、足と目と土地の人と対話する耳と口。そして何よりも土地の人の気持ちになり切る心である。」前半部分は、施策を考えるときは机上ではなく、自分の足と目、そして地域の人との対話が重要であることを示唆していますが、これは、これまでも私も考えてきたことです。しかし、最後の下りに、はっとさせられました。「土地の人の気持ちになり切る」つまり、人間が何を持って行動するのかについてきっちり考えないと、実際には動かないし、良いものとはならないのです。いろいろな施策を実行しても上手くいかないときがあります。その原因の中には、そもそも人の心に届いていないことがあるのではないかと感じました。関係する人の気持ちになるのはもちろん、実際にその人が行動なりを起こすためには人の気持ちに施策が訴えられているかが重要であることを考えさせられました。

2つ目は、奈良で宮大工を営んでいる西岡常一さんの言葉です。彼が先祖代々から宮大工としての教えとして伝えている言葉です。「塔は木組み 木組みは木のくせ組み 木のくせ組は人組み 人組みは人の心組み。 工人の非を責めず 我が身の不徳を思うべし。」です。前段では、塔を作り上げるには、木組みが必要で、木組みを作るには持ち味のある木を上手く組み合わせなければならず、この持ち味のある木を、分業と協力でチームで作り上げ、チームを動かすにはそれに携わる人が心に感じた時であり、出発点となる人が動くことは心に感じたときであることを伝えています。これは、広松伝の言葉と同様であると感じます。心に感じ、訴えるものでなければならぬのです。そして、チームにより個性が組み合わせられていくこともまた大切であると伝えています。後段は部下が失敗しても、自分の失敗であると思えとの戒めです。行政はスタンドプレーでは無理がきます。まさしく、チ

ームプレーです。この心がないとチームでの仕事は良くはならないのではないかと感じました。

#### 5) これから

近年、公共事業に対する世間の目は厳しくなる一方であるが、これまでの社会資本の整備なくして、今日における我が国の社会経済の発展や安全で快適な社会生活はあり得なかったはずで。社会資本は、それ自体は大変有用なものであるが、「公共事業」という言葉のイメージが、最近は悪いものとしてとらえられている面があります。これは非常に残念なことです。

これまでの仕事における心がけにプラスして、自治大学で学んだ、地方自治の本旨、俯瞰的・多角的な考え方、そして何より「人がなぜ動くのか、心を動かされるのか」人の本質にまで踏み込んで考えて行かねばならないと感じています。幅広い視点から課題意識を持ち、地域自体を客観的に調べ、自分で見て感じながら、人の心に響くようなアプローチから、恒に改革する気持ちが大切なのです。

#### 6) むすびに

自治大学校では、同じような志をもつ全国の仲間に出会えたことに、非常に感謝しています。お互いに切磋琢磨しながら過ごした約半年の研修生活は、私の人生の中で、かけがえのない時間となりました。研修そのものだけでなく、寮生活における様々な出来事も、これからの私の人生の糧となると確信しています。研修生の仲間に、心から、感謝しています。

さらに、職場を留守にしたのですが、職場の皆様からの協力を深く感じ、自分が多くの方々に支えられていることに改めて気づくことができたことは大きな財産でした。

最後になりますが、福岡県職員の自治大学校研修派遣は、最近、技術職員を毎年1名程度は派遣しています。残念ながら、土木職の派遣は、これまでで私を含めて2名です。興味を持たれた方は、是非とも前向きに考えていただけると幸いです。協力は惜しみませんので、連絡お待ちしております。

※朝倉県土整備事務所 道路課